

平成30年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 北九州市 】

1 実践テーマ	【 II III V 】
2 実施対象者	二島小学校 A 5, 6年生 (99名) B なのはな学級 (特別支援学級 知的 7名) C 4年生 (37名)
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (A 体育 C 総合 ) ② 行事名 ( ) ③ その他 (B おもてなし講座 5, 6年生) (2) 地域における活動 ① イベント名 ( ) ② その他 ( )
4 目標 (ねらい)	A 国際経験豊かな講師より講演をいただき、外国の人へのおもてなしの心を学ぶことを通じて、対人関係の向上、コミュニケーション能力の向上を図る。 B トランポリン等を購入し、特別支援学級の児童が体育の授業で活用する。感覚統合の向上と運動により親しむことをねらいとしている。 C 肢体不自由や視覚障害のある方の生活する苦勞や工夫を知り、体験を通して考え、障害をもった方たちと共生する社会について考える。また、障害者スポーツを通して、障害者と健常者が交流することで、障害者に対する理解促進につなげる。
5 取組内容	【A おもてなし講座】 (10月 9日：総合的な学習の時間5年生・6年生)
	 



筑波大学客員教授の江上いずみ教授を招いて、相手に喜んでもらうために心を尽くす「おもてなしの心」について講演いただいた。CAとして海外の方との経験などを通して相手を大切にすること、思いやる心について演習を交えて学習した。

**【B トランポリン等を活用した運動あそび】**  
(体育の授業および日常での利用 なのはな学級等)



オリンピック競技でもあるトランポリン等の児童用運動用具を購入して、主に特別支援学級の児童を対象に、体育の授業や日常の活動の中で継続的に利用させた。

**【C 障害者の生活とボッチャの体験】**

障害者支援施設 ちづる園の方をお招きし、ちづる園スタッフ支援のもと、車椅子の利用体験の他、アイマスク歩行や水飲みの体験等の実践を行った。また、パラリンピック競技である「ボッチャ」の体験も行った。最後に、実際に現場で働く方々としてのやりがいや苦労などを語ってもらった。



6 主な成果

**【A おもてなし講座】**

- ・外国の人々の生活や文化について、また、日本の伝統文化について、体験を通して理解を深めることができた。
- ・「先言後礼」のような礼儀について、また、ノックの仕方などマナーについてわかりやすく話しをしていただき、子どもたちの理解と行動につながった。
- ・特に5年生は「自然教室」前に実施できたため、宿泊施設において「あいさつ」や「マナー」等について施設職員よりお褒めの言葉を多くいただいた。

	<p>【B トランポリン等を活用した運動あそび】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 運動器具を利用することにより、普段とは異なる体の動きが実現でき、運動能力の向上につながった。</li> <li>• 体育と日常生活の中の両方で利用させることにより、継続的な運動習慣の定着と、意識の向上につながった。</li> <li>• 普段行っている運動がオリンピック競技であることを意識させることにより、オリンピックの体操競技の中でも比較的マイナーなトランポリン競技の意識啓発につながった。</li> </ul> <p>【C 障害者の生活とボッチャの体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 車椅子やアイマスク等について実際体験することにより、自分たちの日常生活で、障害者の方々がどのように感じているかを考えるきっかけになった。</li> <li>• 障害者スポーツの難しさや奥深さについて、実感を伴った理解をすることができた。実際、体験した子どもたちも、ボッチャのスポーツとしての楽しみに気付いた感想が多く見受けられた。</li> </ul>
7実践において工夫した点(事業の特色)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 各実践の後に、子どもは振り返りを行い、これからの生活の中で学んだことをどう生かすか考えさせ、学校通信や学年・学級通信で生徒や保護者にその成果を周知した。</li> <li>• 「おもてなし講座」については、今回3小学校でグループを組み、講師を招聘したため、少ない予算で招くことができた。</li> <li>• 実際に用具を用いて体験させることを基本とし、実感を伴った活動を行うように計画した。</li> <li>• 特に「おもてなし講座」や「障害者の生活体験」では、他者の視点からわかるようにしたり、できるようにしたりするという感性を持つことができるように工夫し、思いやりの心を持ち、表現力を高めることができるように誘導する工夫を行った。</li> </ul>
8主な課題等	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 今回は全校での取組はできず、限られた範囲の取組となってしまった。</li> <li>• 体験を伴ってはいたものの、受動的な活動が多かった。また、保護者・地域を巻き込んだ取組も想定できたが、実施までには至らなかった。</li> <li>• この取組を単発で終わらせず、継続することで子どもへの定着が図られるものである。今後、職員の負担が過度に増加することなく取組めるよう企画を考えていく必要がある。</li> <li>• 障害者スポーツの体験を一過性のもので完結してしまわないため、冬季パラリンピックの開催後は、子どもたち自身の体験と障害者アスリートの苦勞が結びつくようなアフターフォローを行っていきたい。</li> </ul>
9来年度以降の実施予定	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 「おもてなし講座」については、来年度以降も講師の都合等を配慮しながら実施したいと考えている。</li> </ul>